

床材が生活に与える影響

主としてフローリング床のくつろぎ姿勢について

○大阪樟蔭女大学芸 一棟宏子

目的：近年、住宅の床材としてフローリングが広範囲に普及している。特に、フローリング材は居間・食事室・台所で使われる場合が多く、日常の起居様式に与える影響は大きい。本研究はこうした床材の傾向が、生活面にどう影響を与えているかを明らかにするために行ったものである。

方法：徳島県徳島市郊外の新興住宅地（開発が進行中、総建設予定戸数1685）の戸建て住宅に住む世帯を対象に、1997年8月、アンケート調査を実施した。調査票の配布は192件、回収は171件、有効回収率は89.1%であった。

結果：①対象世帯の住宅は建築年数が6～10年、30～40代の核家族が多かった。②家族の集まり部屋はLDK型が4割以上を占め、その9割が板張りフローリングを使用。フローリングのまま使用しているのは約3割で、多くは敷物（じゅうたんが一般的、夏は蓆やござ、冬にはホットカーペット等）を使っている。敷物は、肌触りのよさ、キズ防止、横になってくつろぐためが多い。③フローリングについて「掃除がしやすい」「清潔感がある」と評価が高い半面、「くつろぎやすい」「足元が冷える」「汚れが目立つ」の各項目の評価は低い。④集まり部屋に家具を置き、イス座でくつろぐ家庭が大半である。くつろぎの姿勢を「TVを見る」「家族でくつろぐ」「新聞を読む」で見ると、30～40代の男性では床に寝そべる姿勢、女性は床に直接座る姿勢が多くとられ、部屋がイス座のしつらえであっても、起居様式はユカ座との併用が目立っている。集まり部屋の理想的な床仕上げとして、フローリングが現状よりも比率が下回っているのは、くつろぎ姿勢の実態がかなり大きく影響しているものと思われる。暖房はエアコンのほか床暖房の希望が相当強い。